
時計の光

ふらじゃいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時計の光

【Nコード】

N7967L

【作者名】

ふらじゃいる

【あらすじ】

仕事に疲れた青年と、ノラ猫のお話

こいつは何もわかってない。

ロオムは勝ち誇ったような笑みを抱きかかえた猫に向けた。

「いいか、あれは食い物じゃない。そもそも触ることさえできないんだ。わかるか、おい、わかるか」

彼は、仕事場の先輩の口調を真似て、嫌みつたらしくのたまった。「無駄だな、お前に何言っただって」

「ニヤア」

ロオムは、あの先輩社員と同じ、蔑んだ笑みを作った。猫は束縛から抜け出たくて、彼の顔を前足でぺたぺたと叩いた。わかつたよ、と、猫を地面に落とす。

猫はロオムの忠告を無視して、素早い動作で螺旋階段の手すりをつかみ、体を持ち上げてそこに座った。そして、虚ろな目を遙か彼方にある「時計」に向け、前足でときおりそれをつかもうとすることがあった。

「懲りないね、お前も」

これが、いつも最後に言われる言葉だ。

大地に穿った円筒の深い大穴に螺旋階段を敷き、無数の横穴を開けて形成されたこの世界は、地上は全域背の高い植物たちに覆われていて太陽の光が届かない。

円筒の大穴の中心に突き刺された「時計」は、途方もなく大きな棒で、昼間は太陽のように明るい光を放ち、夜が近づくにつれて次第にその明るさが衰えていき、やがて月のように柔らかい光を漏らす。「時計」と呼ばれるこの棒は、要するに街灯の役目なのだが、ここに住む人間たちは小さな頃から毎日「時計」を見て育ってきているので、その明るさを見るだけで今が何時かということが自然に分かるようになっていた。

さっきまで真っ赤な夕暮れだった「時計」の明かりはだんだんと

白く弱い光に変わっていき、とうとう「時計」は世界に夜の訪れを告げた。白い光になると地上から入ってきた虫たちが引き寄せられるように次々と「時計」に飛び込んでいき、焼かれていく。

「時計」の白い光にはなんとも言えない魅力があった。暗闇に浮かぶ穏やかな明かり。泥酔した者が闇に映るうおぼろげな「時計」に誘われて、手すりを越えて落っこちてしまうことも少なくなかった。

ロオムには、虫たちがそういう理由である「時計」に飛び込んでいるように思えてならない。

「えっ」

猫が飛んだ。「時計」に飛びつこうとしたのだろうが、それは空しく、遙かな螺旋の闇の中に吸い込まれていく。

ニャア、と一つ鳴いたところで、反重力電磁ネットがどこからともなく放たれ、猫を包み込んで中空に静止した。

「そうだな」

つぶやいて、ロオムは同じように手すりを越えて飛んだ。

(後書き)

お読みいただきありがとうございます。ありがとうございました。
よかったです。感想いただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7967/>

時計の光

2010年10月17日01時44分発行